

# 児玉聡『功利主義入門——はじめての倫理学』

筑摩書房、二〇一二年

佐藤 岳 詩

本書は児玉聡氏によるおそらくは本邦初の功利主義専門の入門書である。

功利主義といえば、義務論、徳倫理学などと並んで、欧米を中心とする規範倫理学の主要学説の一つであり、特に発祥の地である英国においては倫理学のみならず政治や経済、法学と多分野にわたって広範な影響を与えてきた伝統ある思想である。

しかしながら我が国においては、著者の前著である「功利と直観——英米倫理学史入門」を含め、倫理学や倫理学史にかなする入門書、あるいはJ・S・ミルやJ・ペンタムに関する入門書こそ数多く出版されてきたが、「功利主義」のみに論点を絞った入門書は例を見なかった。そこには明治以来、功利主義に帰されてきた、利益至上主義、冷徹な合理主義などの、否定的な印象も影響を与えているかもしれない。しかしながら、本書はそのような印象を払拭し、広く功利主義を好意的かつ魅力的に紹介するという意味で、功利主義研究にとって、そして我

が国の倫理学研究全体にとって、非常に画期的かつ有益な一冊である。

## 一 概 略

本書は全七章から構成されている。順に見ていこう。最初の二章は導入である。第一章「倫理と倫理学についての素朴な疑問」は、本格的に功利主義を紹介する前のウォーミングアップとして、「倫理学」の手ほどきが行われる章である。倫理学の内実の紹介や、倫理について抱かれがちな誤解を解いていくことを中心として、倫理学とは何を考える学問であるのか、批判的に考えるとはどのような営みであるのかを簡明に示される。

第二章「功利主義とは何か」では、具体的には功利主義がどのような特徴を持った主張であるのか、筆者が専門とするJ・ペンタムの『道徳および立法の諸原理序説』の紹介を通じ

て提示される。その際、J美というキャラクターが導入され、以後の全編を通して読者は彼女とともに功利主義を学んでいくという仕掛けが施されている。これは、とかく敷衍が高くなつてしまいがちな倫理學理論、道徳哲學を、誰にでも取っつきやすい開かれたものとする点で大きな効果を上げている。実際、著者はその後、本書に引き続き続いて「マンガで学ぶ生命倫理」わたしたちに課せられた「いのち」の宿題」を上梓しており、専門家だけでなく多くの人々に倫理について考えてもらうことを常に重視するその姿勢は、社会的責任をも担う専門研究者として、大きく評価に値するものであるだろう。

第三章と第四章は、それぞれ「功利主義者を批判する」「洗練された功利主義」という題で、功利主義がどのような批判を受け、それに対応してどのように変化してきたかが説明される章である。そして、功利主義に寄せられる様々な批判のうち多くは、筆者が「わら人形攻撃」と呼ぶ、功利主義の批判者らによつて戯画化された「功利主義」に向けられたもので、洗練された現在の功利主義にはあたらぬものであることが明示される。これによつて、多くの功利主義者らは、利益至上主義、冷徹な合理主義者という、入門者が抱きがちな否定的イメージから解放されることになるのである。

第五章「公共政策と功利主義的思考」は少し角度を変えて、現実の政策決定などの場面で功利主義がどのような機能を果たしてきたか、あるいはこれから果たしうるかが紹介される。こ

の章はまさに応用倫理學と規範倫理學の両方を修めた筆者の面目躍如となつており、公衆衛生の問題とつきあわされることで、功利主義と現実の社会問題との関係が鮮やかに描き出される。特に本章および最終章で扱われるナッジ戦略は、功利主義のもつターナリスティックな側面と自由主義的な側面を調停する新しい提案として、非常に示唆にとんだものである。

また第六章「幸福について」は、いわば功利主義の奥義であり核心とも言ふべき「幸福」とは何であるかが、現在有力とされる三つの學説をもとに語られる。最終章である第七章「道徳心理学と功利主義」は、脳科学や心理学、実験哲學などのデータをもとに、実際に我々が行っている思考と功利主義的な思考の関係が紹介される。

そして最後に、本書の内容を紹介する上で、巻末のブックガイドにも触れないわけにはいかない。入門者の必読文献だけでなく、初心者には危険な本(Ⓔ)も取り上げられ、本書を読み終えた読者が次なるステップに進むための道標もしっかりと示されている。

以上を通じて、J美と読者は功利主義の思考に触れ、そのエッセンスをつかむことができる。物語仕立てで語られるJ・S・ミルやW・ゴドウィンに関する逸話などが随所に織り込まれて読者を飽きさせない工夫が凝らしてある一方で、最新の科学的な知見などを挿入することで、読者の知的好奇心をくすぐり満足させる手法は、これまで「倫理學」を学んだことのない

人々に、まず功利主義や倫理学に対する興味をもってもらう、という目的から見て非常に優れたものである。映画や小説などに題材をとり、時にはジョークもこらされた内容や、平明で読みやすい文体も手伝って、気がついたら一晩読みふけてしまった、という読者が続出したというのも頷けるものであるだろう（評者もその一人である）。

したがって、本書は新書という制約の多い形式の中で功利主義の入門書として果たしうる役割を十分に務めたものであり、少しでも功利主義や幸福という言葉に興味をひかれるすべての人に勧めたい一冊である。

とはいえ、どれだけ魅力的な入門書であっても、専門家が責任をもって著した「学」にかかわるものである以上、それは正確さや必要な情報を欠いたものであつてはならないだろう。以下では、その点について少し検討してみたい。

## 二 功利主義の入門書として

ある理論を好意的に紹介する方法には様々なものがあると考えられるが、たとえばその一つはその理論のまさに核となつてゐるテーゼの魅力を示すことであり、特にその理論の長所を述べることであるだろう。実際、本書の論の運びは、第二章から第四章で新旧の功利主義の中心的テーゼを描き、第五章では現実の問題に即してそれがいかに有用なものであるかを示すとい

う流れになつてゐる。特に第五章は前節でも述べたように、公衆衛生の問題を中心として、政策決定の場における功利主義のスマートさ、力強さをいかんなく表現していると思われる。

しかしながら、ここには他の理論との関係という視点が欠けているとすれば、理論の十全な紹介としてやや不完全なものであると判じざるを得ない。たとえば、筆者は、前著「功利と直観」においては、功利主義と直観主義を対比させることによつて、両者のより深い理解をもたらすことに見事に成功したということが出来る。しかしながら、本書においてはその直観という語はほとんど登場しない。あるいは、現代において功利主義としばしば対比される徳倫理学などに関しても、功利主義の特徴、長所と短所を浮かび上がらせる上で、その理解が重要であると考えられるが、それらの紹介には頁は割かれていない。

もちろん、まずはまったくの初学者に功利主義に興味をもってもらふという、入門書に課された目的からして、これは適切な取捨選択であると考えられることもできる。したがって、他の規範倫理学理論の説明が不足していること自体は本書の魅力を増やなうものではない。しかしながら問題は、評者の見るところ、他の理論によつて功利主義に投げかけられた批判の扱いがやや不十分であるために、功利主義の特色や切迫性が伝わりにくいこと、そしてそのために特に現代的な功利主義についての情報提供という点で物足りないように思われる点である。

確かに、本書の第三章における功利主義批判と第四章におけ

る批判への応答によって洗練された功利主義の紹介は、他の理論との一つの応酬とそこから功利主義が得た成果を示したものとと言えるだろう。しかし一八世紀末の功利主義者W・ゴドウィンを中心とした議論の展開は、読み物として興味深いものではあるが、その後の功利主義を巡る現代的な問題を捉えているとは言いがたい。

たとえば筆者は最終的に規則功利主義、間接功利主義の登場をもって、功利主義は身近な人々に対する愛情をも正当化可能となり、家族への愛情と公平性のどちらを優先すべきか、という問題は解決されたかのように記述している (pp. 76-82)。しかしながら、現代の功利主義を巡る論争で問題となっているのは、そもそも家族への愛情を功利主義的に正当化することそれ自体の是非である。つまり、結局は効用の多寡によって維持される愛情や友情はその名に値するか、ということが切り口となつて、功利主義と行為、性格、感情などとの関係が問題となっている。単に功利主義によつても愛情が正当化できるということを示すだけでなく、そもそも功利主義によつて愛情を正当化するという姿勢、合理主義的な発想そのものの妥当性が問われているのである。

あるいは個別の行為との関係、規則作りの困難さなど、間接功利主義、規則功利主義に対する批判も現代では多くなされているのだが、それらも取り上げられていない。確かに新書形式の入門書という制約はあるとしても、こうした批判を取り上げ、

正直に自らの弱点をもさらし出した方が、功利主義の紹介としては誠実であり、結局は長い目で見て功利主義を正しく世に広めることになるのではないかと評者は考える。特に、教科書や参考書として授業で用いられる可能性も考慮に入れるならば、好意的であつても偏りすぎない記述こそ重視すべきであつたらう。

### 三 功利主義論として

ここでは最後に、本書が担っている入門書としての役割から少しだけ掘り下げて、筆者の功利主義論についても述べてみたい。功利主義といつても一枚岩であるわけではなく、規則功利主義と行為功利主義の衝突をはじめ、様々な理論内部での対立を抱えていることは周知の事実である。中でも、最大の問題の一つは、いったい何が最大化すべき「効用」「幸福」であるのか、ということであるだろう。

本書では「幸福について」と銘打たれた第六章がこの「幸福とは何であるのか」という問題を正面から扱ったものとなっている。ここでは、いわゆる快樂説、欲求充足説、リスト説という幸福の定義にかかわる三つの案が紹介される。

具体的に第六章の流れを見てみよう。快樂によつて幸福を定義するという快樂説は、様々な快苦に共通の性質を取り出すこととの困難さを通じての、快苦が測定・定義できないという議論、

快樂機械などの例を通じての、幸福感と幸福は異なる、という議論によつて退けられる。選好や欲求の充足によつて幸福を定義する欲求充足説は、過去の欲求は現在の幸福につながるということ、適応的に形成された欲求や愚かな欲求の充足は幸福とはいえないこと、などの議論によつて退けられる。人々の基本的ニーズに基づく客観的リストを作ることで幸福を定義する客観的リスト説については、過不足ないリストを作ることが難しい、そもそも幸福が何であるかに答えていない、という反論がなされる。

以上を通じて長所と短所を比較検討した上で、筆者は暫定的な見解として、政策レベルにおけるリスト説、個人レベルにおける（合理的）欲求充足説を提案する。

しかしながら、評者の読むところ、この章の運びは特に本書全体との関係で見ると、あまり成功していないように思われる。それは筆者自身が功利主義者として、まさに何を幸福とするかについて明確な態度決定を行っていないからではあるまいか、と推察される。

たとえば、暫定的にはいえ欲求充足説を支持するのであれば、その直前で提示した欲求充足説を退ける議論に対する、せめて、暫定的なる反論を提示するべきであるだろう。筆者は一応、欲求の合理化という作業を通じて、愚かな欲求などを排除することを提案するが、これはまず過去の欲求の問題を解決できない。また適応的選好形成についても、結局、合理性の中身

を説明しておらず、どのように形成された選好なら合理的なのかが不明である点で、何の解決にもなっていない。これでは、幸福とは何かという問題を合理性とは何かという問題にスライドさせたに過ぎないと言われても仕方がないだろう。

さらに言うと、筆者が自身の暫定的な見解を述べた箇所は、本書の合評会において伊勢田哲治氏が指摘したように、「どうすれば幸福になれるか」に答えたものであつて、最初に立てられた課題である「幸福とは何か」という問いに答えるものではない。

そして、このことは結局、評者の考えでは、筆者が「なぜ倫理的でなければならぬのか、なぜ功利原理に従わねばならぬのか」という根本的な問いを回避してしまつていふことにもつながつていふ。実際、誰かに功利主義の魅力を伝えようといふときに、最大の障壁となりうるのは、まさにその問いであるだろう。しかし、その点を本書は「美」というキャラクターにベントラムの書を与え、快苦を考慮に入れるのは「当然」、最大多数の最大幸福の正当性は「その通り」と語らせることでその問題を済ませてしまつていふ。もちろん何の疑問もなく「その通りだ」と思える読者には、それでよいだろう（それはそれで批判的精神という点では問題であるが）。しかし、そうは思えない人々にとつての「なぜ功利原理に従わねばならぬのか」といふ疑問は最後まで解消されないままである。この問いは入門書だからと答えずに済ませてよいものではない。むしろ入門書だ

からこそ、答えられねばならない、十分に説明されねばならない間いだったのでないだろうか。

だが、仮に、たとえば幸福とはどのようなもので、なぜそれが私たちにとって重要なものであるのか、なぜ我々は幸福を求めるのか、十全に示されていたとしよう。その場合には、その重要性の証示と公平性を重視する議論などを通して、功利原理に従う理由という問題に対しても何らかの答えが与えられていたかもしれない。したがって、筆者自身の功利原理の正当化根拠、および功利主義における立場が不明瞭であるために、最初から功利主義に入門してみてもいいかなと思っている読者以外に対する説得力が薄れてしまっているように思われるのである。

さて、以上、批判的なことも述べてきたが、本書が全体として功利主義への優れた入門書として、得がたい価値を有する良書であることには疑いの余地がない。本書の内容に納得するにせよ、しないにせよ、倫理に関心をもつあらゆる人に、一度は手にとってもらいたい一冊である。

(さとう) たけし・日本学術振興会特別研究員・京都大学